

舞踊の効果的指導法の研究

— 日英のナショナル・カリキュラムにおける学習内容の比較を通して —

小松 恵理子

1. はじめに

日本の公教育における、舞踊教育は教科体育の中で行われている。具体的に小学校体育科では、低学年「基本の運動・模倣」及び中・高学年「表現運動」として、中・高校では「ダンス」として取り上げられている。その価値は「身体運動を用い自己の内面を表す」という活動を通じ、感性を豊かにし創造性を養うことに認められている。

しかし、小学校教員に限らず、中学・高校の体育教員のように専門学部・学科を卒業した指導者もダンス専門の教員以外はダンス指導を苦手とする者も少なくない現状がある。

教員養成機関である大学や短期大学では、卒業後現場での舞踊指導に当たる学生に、限られた時間の中で舞踊の本質をはずさず効果的に楽しく学べる指導法に関する情報や実技提供の責任を有する。

そこで、本研究では創作する舞踊の教育的価値を提唱し、世界の舞踊教育の中にその影響力を及ぼしたルドルフ・ラバンの思想が浸透する英国のカリキュラム、授業実践等の舞踊教育の実態を明らかにし、わが国の舞踊教育と比較することにより、より楽しく効果的な舞踊指導の為の方策を探ることを目的とする。

2. 日英の舞踊教育の比較

1) 概要

わが国の体育は、身体訓練を中心とする戦前の「身体の教育」、戦後の教育の手段としての価値観に由来する「運動による教育」という歴史的経過をたどり、現在は「運動の教育」すなわち、前者二者の利点を踏まえながら運動そのものの「おもしろさ・楽しさ」を享受し生涯を通じて運動に親しむ人間を育てる体育が展開されている²⁶⁾。

その理念を受け、舞踊教育も既製作品を習い覚える舞踊教育から創造的芸術体験としての「表現運動・創作ダンス」の名称が定着してきている。最近では、生涯教育の一環として「リズム型ダンス」⁶⁾なども取り上げられている。

一方英国（ここでは、主にイングランド及びウェールズ）は、19世紀後半の舞踊教育の既製ダンスを習い覚えるものから、1938年ドイツからの亡命後のルドルフ・ラバン（「現代舞踊の父」と呼ばれ創作舞踊の理論的基礎を築いた。）の影響を受け、多様な運動経験を提供し、創作する舞踊の教育が公教育のなかに浸透していった。（表1参照）⁶⁾

その後、1988年英国教育改革案の中で舞踊が音楽との合科という消滅の危機に合い、当時の舞踊関係者の敏速にして堅固な協力のもとに、現在「体育」の中の一領域に存在し活性化している。しかし、舞踊関係者は、「舞踊教育はプロセスかプロダクトか？」の議論にみられるように、芸術的専門教育を強化する動きもあり、他の芸術との関連が強調され、芸術科目としての独立も望まれている¹⁹⁾。

2) ナショナル・カリキュラム (学習指導要領)

わが国の学習指導要領 (教育課程の基準) は昭和33年から、それまで参考程度の手掛かり例示であったものから法的拘束力をもつ存在へと変化し、現在にいたっている。日本での教育課程は「児童・生徒の教育のために、学校が一定の観点から選定し、体系化した教育内容の系列」とされ、その具体的基準である学習指導要領と各校の実情に応じて編成²⁷⁾される。表2～5に掲げられているのは、学習指導要

表1) イギリスにおける体育科の目的・目標観の変遷

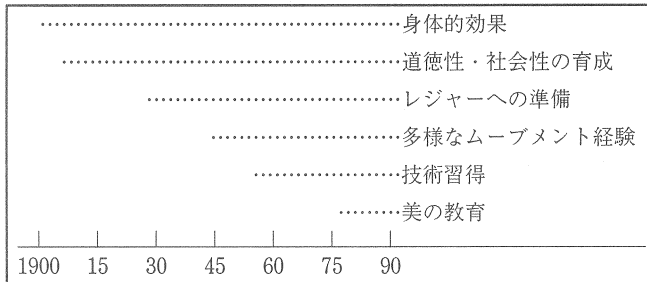


表2) 日英教育要領にみられる学習内容

日 本		英 国
1989年：学習指導要領による		1992年：The National Curriculumによる
小 学 校		キーステージ1 (5～7歳)
1・2		生徒たちは：
基本 の 運 動 (模 倣 の 運 動)	(動物) ぞう、きりん、うさぎ、へび、鳥、昆虫、魚など	移動・跳躍・回転・ジェスチャー (移動を含まない運動)・静止を含む基礎的運動の中でコントロール、協応、均衡、平衡、上昇などを経験・発達させるべきである。
	(乗り物) 電車、大型バス、オートバイ、飛行機、船、遊園地の乗り物など	対比的な速度・緊張・継続・形・大きさ・方向・高さを探求すべきである。また、彼らが行ったことを描写 (口頭で) すべきである。
	歌を伴う運動遊びや簡単なフォークダンスなどを含めて指導することができる	音楽を含む、ある範囲のまた多様な対比的な刺激で作ることを体験すべきである。自然な反応や計画された課題を通してムードや感情を探求する機会が与えられるべきである。 リズム的反応が発達することを援助されるべきである。 明確な「はじめ/なか/おわり」を持ったダンス創作を体験すべきでありまたは導かれるべきである。

表3)

		日 本		英 国	
小 学 校		3・4		キーステージ2 (7~11歳)	
表 現 運 動	(小) 表 現	○いろいろな題材の様子を動きにより表現する (1) 蝶や風船などの特徴をとらえた動きの表現 (軽い, やわらかい動きを中心に) (2) いろいろな機械やロボットなどの特徴をとらえた動きの表現 (硬い, 機械的な動きを中心に) (3) おまつりやポップコーンなどの特徴をとらえた動きの表現 (楽しく, にぎやかにはずむ動きを中心に) (4) 嵐やロケットの発射などの特徴をとらえた動きの表現 (激しい力強い動きを中心に)		生徒たちは: 即興・探求・選択・内容の洗練を通して明確な「はじめ/なか/おわり」を持ったダンス創作をすべきである。また, カリキュラムの他の側面, 特に音楽やドラマと共同作業すべきである。 さまざまな形や大きさ・方向・高さ・緊張・継続によって運動を豊富するように指導されるべきである。 一つの刺激に反応して, 運動で感情やムードやアイデアを表現すべきである。また, 簡単なキャラクターや物語を創作すべきである。	
		フォークダンス	日本民踊	郷土の民踊を取り上げる。	
		フォークダンス	外国民踊	(1) キンダー・ポルカ (ドイツ) (2) エース・オブ・ダイヤモンド (デンマーク) (3) グスタフス・コール (スウェーデン)	
	(小) 表 現	5・6		さまざまなダンスを描写したり, 解釈したりすべきである。	
		○いろいろな題材の感じを動きにより表現する (1) 稲妻やとび散る火花など鋭い瞬発的な感じの動きを中心とする表現 (2) 火山の爆発や溶岩の流れなど, 激しい感じと粘る抵抗ある感じの動きを中心とする表現 (3) 波と船や, 風と帆など, 対立・対応する感じの動きを中心とする表現 (4) 建設作業の様子やスポーツ活動など, はじめ, なか, おわりを工夫した表現			
		フォークダンス	日本民踊	郷土の民踊を取り上げる。	
フォークダンス	外国民踊	(1) バージニア・リール (アメリカ) (2) コロプチカ (ロシア) (3) マイム・マイム (イスラエル)			

表4)

日 本		英 国
中 学 校		キーステージ3 (11~14歳)
ダンス (中・高)	創作ダンス	<p>生徒たちは：</p> <p>意味やアイデアを伝達するために、適切な創作法や様式、技術をいかに使用したり発達させたりするかを教えられるべきである。</p> <p>伴奏形式に対して感受性を示しつつ短いダンスを創作したり演技したりするように指導されるべきである。</p> <p>様式への理解を示し、セットダンスを演技するように教えられるべきである。</p> <p>彼らの意思や結果（を書いた）文書や口頭での描写で、彼らのダンス創作を支えることを教えられるべきである。</p> <p>様式の差異・制作面・文化的／歴史的な脈を認識することでダンスを描写したり、分析したり、解釈することを教えられるべきである。</p>
	日本民踊	
	外国民踊	

領の中に示された舞踊学習内容の一覧である²⁾。

一方英国では、それまで各校の校長や担当者の裁量に任されていた教育内容について、1988年の教育改革により新たにナショナル・カリキュラムが作成されることになった。1992年執行開始されている⁶⁾。表2～5に示される²⁾、英国欄のキーステージは日本欄の学校段階にはほぼ相当すると思われる段階を示した。英国学校制度は複雑であるが、最近の制度を図1に示してある¹⁾。5～11歳までを初等教育、11～16歳 (Secondary School/義務教育修了年齢まで) 及び18歳まで大学進学前までを中等教育、18歳以上を高等教育としている。16歳を修了した者は General Certificate of Secondary Education (GCSE/一般中等教育認定) を受けて社会に出る者と、さらに18歳まで学校に残り、より専門化された Higher School Certificate (Advanced Level/Aレベル or ASレベル)²⁰⁾ を受け、大学に進学する者もある。これらの試験の成績は就職や進学時に重要である。その後は職業系の学校や学位取得のための高等教育機

表5)

日本		英国
高等学校		キーステージ4 (14~16歳)
ダンス (高)	創作ダンス	生徒たちは： 複雑で技術的により高度なダンスを正確に、表現的に演技することを教えらるべきである。芸術的意図が成功裡に交流できるダンスを創作する機会を与えられるべきである。 形式や内容の理解を示しつつ、ある範囲の様式をダンスする機会を与えられるべきである。 創作の経過を記録することを可能にさせるべきである。 彼らの創作のための制作面を工夫したり、デザインしたりすることを指導されるべきである。 注) (制作：舞踊効果を上げるための装置・配光・衣装など) 創作・演技・文化／歴史的な文脈・制作を含むダンスの全ての側面を描写したり解釈したり、評価したりすることの機会を与えられるべきである。
	発表会 〔A テーマ設定の視点〕 〔B 創作の手順〕	
ダンス (中・高)	日本民踊	(1) タンゴ・ミクサー (アメリカ) (2) ミザルー (ギリシャ) (3) ロード・ツー・ジ・アイルス (スコットランド) 〔曲目選定の考え方〕
	外国民踊	

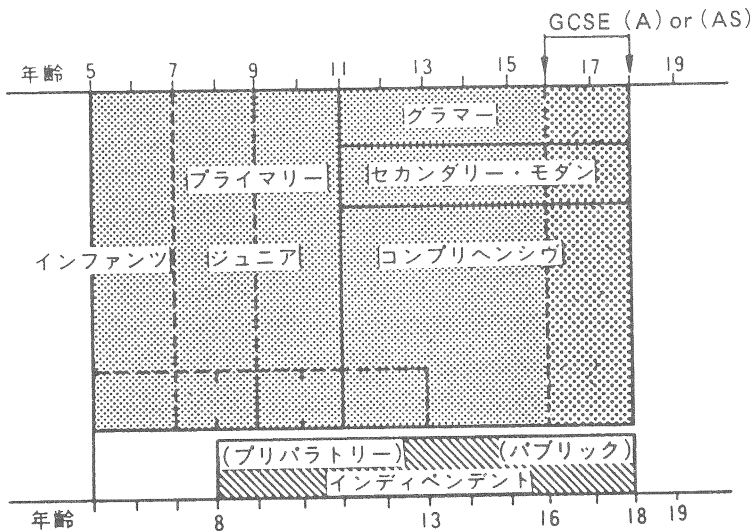


図1 [イギリスの学校制度]

関が設けられている。

表2～5を概観すると、日本欄では、直接具体的な題材や表現内容を示したものが多い。それに比較し、英国では、まず、身に付けるべき運動名や身体支配に関する内容が列挙されている。このことは、表1に示されるように舞踊教育が運動教育として発展してきた歴史や、芸術教育・審美的教育の一環としての役割も加わり、パターンやデザインという形式美的内容を含む³⁴⁾英国と、同様な価値観を持ちつつも舞踊の特性を「変身・模倣の欲求の充足」⁷⁾という、内面の表現を重視する日本との違いに起因するとも考えられる。

このことに関し、大貫は「日本の舞踊教育が危ない」⁷⁾と指摘し、「内面の表現」も然る事ながら運動そのもののおもしろさを探求し、運動で知的に遊ぶ(例:積み木を組み立てるように運動を組み立てる。)必要があるのではとラバン運動理論を用いて警告している。

また、英国中等教育ではキーステージ4にみられるように、かなり高度な内容を指導することができる。これは、従来運動教育的側面の強かった、イギリス舞踊教育がアメリカの芸術教育的側面の影響も受け、プロセスを重視する教育的価値だけでなく、芸術的/技術的にも質の高い生徒や観客を育てたいというプロダクトを重視する流れを取り入れている結果とも考えられる。

カリキュラムに示される学習内容から示唆されることは、具体的な題材の表現に偏らず運動そのものの探求をいまま少し日本の舞踊授業の流れに取り入れるべきではないかということである。

3) 授業実践

日英の一般的な舞踊授業の組み立てを表6に示し、表7～10には、年齢段階別にそれぞれの国の実践例や代表例を示した。日本では、表6左欄に示されるように「Warm up」において、心と体が運動出来る準備を整えることに主眼がおかれている。次に本時の課題が伝えられ、即興や動き作りが進められる。最後に出来た動きやフレーズを見せ合う。すなわち、舞踊活動の基本である「創り・踊り・観る」活動が一時間の中に全て含まれる、一時間完結型授業が主流となっている。これらの形式は英国と酷似している。

英国では同じく表6の右欄に見られるように、授業の構造は「Warm up/Exploration/Development (+Dance)/Appreciation」とされている。それについてラバンセンター・フォー・ムーブメント・アンド・ダンス(以下ラバンセンター)の「指導法」教官であり、舞踊指導の現場と研究に深く関わり、Arts Councilの出版している「Dance in School」のWorking Groupの一人でもある、マリオン・ゴフは各授業の構造¹⁴⁾を次のように説明している。

1) Movement aimsを決める。

「運動はダンス表現の媒体の一つである。ラバンの理論から導き出された運動分析方法は、教師に授業に適切な材料を選択することや、子供たちの運動能力を発達させたり、洗練させたり、また子供たちの反応や要求を批評眼をもって観察できることを可能にする多様な運動的語彙を与える¹³⁾。」とし、その日の授業の「ねらい」は運動的視点で立てられることを強調している。具体的には運動の「ねらい」次の4領域から計画されるべきであるとしている。

表6)

日 本		英 国
3)		
1 時 間 完 結 の 授 業 の 流 れ		A Structure for each Lesson Plan (by Marion Gough 1993)
指 導 の 流 れ		
	指 導 内 容	期 待 する 反 応 を 引 き 出 す ポ イ ン ト
導 入	・ ウォームアップ	Movement aims ラバンの運動分析法による運動の構成要素 Body / Action · Space · Dynamics · Relationship から導き出される。
課 題 提 示	・ 課題提示	Stimulus Movement aims に応じて運動を引き出すための具体材料。例) 彫刻の写真・詩・小道具など
	極限化の指導	Introduction / Warm up 身体を運動をできる状態に持っていく準備運動。また、心を解放する。
	多様化の指導	さらに、その日の課題の材料(運動)の提供もここで行うこともある。
課 題 の 展 開	個別化の指導	例) travel / swing / stretches 既に経験した、単一運動を幾つかつなぐ。
	極限化の指導	Exploration 刺激によって運動をさらに深く探求する。個人で行うことが多い。
	・ リハーサル	例) 写真や絵などの赤や青など色から受ける印象で、先の運動を変える。
	・ 発表	Development (+Dance) 先に見つけ出した運動をパートナーとの関係を考えたり、ダンスフレーズとして変化・発展させる。
ま と め	・ 感想・まとめ	Appreciation and Evaluation お互いの作品やシーケンスやフレーズを見せ合い、良い点、もっと工夫できる点について、話し合う。
・ この課題で教えたいことを明確にして授業案を考える。 ・ 極限化・多様化・個別化の指導を場面に応じてくり返し行う。		

表7) 授業実践

日 本	英 国
<p style="text-align: right;">10)</p> <p>(社)日本女子体育連盟平成7年度(1995)夏期講座 <学校体育講座> - 小学校の部 - 低学年(模倣運動)</p> <p>Warm-up リズムで遊ぶ 友達と関わって。 1)「踊りの好きなウンパッパ」を踊る スキップしながら、いろいろなお友だちに出会って。 2)体のいろいろな所を使って。</p> <p>展開 輪を使って。 1)輪で遊ぼう。 一人で遊ぶ。二人で遊べる? 電車・飛行機・レーシングカー・くぐったり・ 転がしたり・輪投げができる 2)くぐって変身, どこでもドア 輪をくぐったら, そこは不思議の世界・・・ 次にくぐると, 海の底。みたこともないような 深海魚・・・ 今度はどこにいけるかな?</p> <p>終末 やったことを見せ合おう。</p>	<p>キーステージ1(5~7歳) Raventone Primary School</p> <p>Warm-up 1)円に沿って, 歩/スキップ/サイドステップ/ ギャロップを行う 2)高くなろう-小さくなろう/広くなろう-細く なろうと課題を出される。 3)同じ課題で異なる動きを考える。 (即興)</p> <p>Exploration 跳躍→回転→高くへ→ 回転→小さくへ→跳躍から空中へ→ ローリング→細い形でポーズへ</p> <p>Development 1)パートナーを見つけ上記のシーケンスを用い, パートナーとの関係を探求する課題を出される。 2)お互いに離れて立ち, 次に近づくところから踊 り始める。 3)いくつかのイメージを通して運動を探求する課 題がだされる。</p> <p>Evaluation 彼らの創作した動きを見せあい, それについて討論 する。</p>

表8)


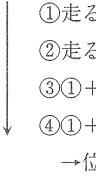
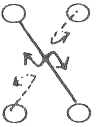
日 本 22) 9)	英 国
<p>(社) 日本女子体育連盟平成7年度(1995)夏期講座 <学校体育講座>—小学校の部— 中学年(表現運動)</p> <p>Warm-up リズムダンスを踊る。 既製の曲に振りつけられた踊りを踊る。 (注:子供や先生が動きを創ることもある。)</p> <p>展開 「洗う—どうなった」(第二時)を友達と工夫する。 1) 課題を知る。 例) ジャがいもを洗うよ。 ゴツゴツ, ドロドロのジャがいも—洗面器 にポー—ゴツン, ゴロゴロ…………… 2) 三人組で洗濯する物を決めて, どうなったの か動く。</p> <p>終末 見せ合う。</p> <p>~~~~~</p> <p>高学年(表現運動)</p> <p>Warm-up 「伸びる—縮む」運動を, リズミカルに反復しつつ, 身体を意識させ, 極限(精一杯)への挑戦と動き の質の変化(多様化)を知覚させる。</p> <p>展開 1) 「走る—止まる」運動の連続から, 急速・急止 など対極の性質を強調しつつ, 表現的イメ ージの世界へ引き入れる。 2) グループ表現—課題「くずれる—築く」のイ メージを出し合う。グループで表したい内容 にまとめる。仲間で見せ合い・修正し踊り込 む。</p> <p>終末 発表(見せ合い)・まとめ</p>	<p>キーステージ2(7~11歳) Raventone Primary School</p> <p>Warm-up 1) 基本的な現代舞踊のテクニックの練習を行う。 例) 弾性運動/バランスを取りながら伸展/パー トナーと向き合う/位置を入れ替わり, 伸展</p> <p>Exploration 二グループに分けられ次のような課題が与えられた。</p> <p> 1) 走る—ポーズA—離れる 走る—ポーズB—離れる 走る—ポーズA+B—離れる</p> <p>2) 上記運動を用いシーケンスを作る。</p> <p> ①走る—ポーズA—離れる } repeat ②走る—ポーズB—離れる } ③①+②身体接触をしないで ④①+②身体接触をしながら →位置交換</p> <p>Development  各グループは線から群へと隊形と, 方向を 変えるように指示される。</p> <p>1) 各グループは全く上記と同じシーケンスを行う が異なる印象が生じる。 2) 彼らは来期の発表会でこの作品をみせることにな っている。</p> <p>4人の生徒(男子2女子2)がこの作品の次のステッ プを示す。</p>

表9)

日 本		英 国
1時間完結の授業の実践例 走る-止まる (中学1年生男女・3時間目)		キーステージ3 (11~14歳) Addy and Stan hope School
	指 導 内 容	Warm-up
導入 5分	集合・挨拶 (1) ダンスウォームアップ 8・8・4・4・2・2・1・1・1・1 のリズムで	1920年代のステップ (チャールストン) の特徴を持った簡単なシーケンスを覚える。 Exploration これらのステップを組合せる。
展開 15分	集合 (2) 課題の提示 ①その場で座って空気が「止まる」感じをつかませる。 ②イメージとかけ合わせいろいろな「走る」を発見させる。 ③「止まる」を抜き出して練習させる。(走らずにその場で) ④走る-止まる, 走る-止まる, 止まる・止まる・止まるという, ひと流れの長さをつかませる。 ⑤4人組でリーダーに続けさせる。(動きながらのブレインストーミング)	Development パートナーとの関係を考える。 Evaluation 彼ら自身の動きについて討論する。 ~~~~~
20分	(3) 課題の展開 ①グループで一つのイメージを決めてひと流れにさせる。 ②通して踊らせる。	Westwood School Warm-up 基礎的運動を行う。 歩/走/ Exploration Object (はしご/箱/布/蛇の目傘) を用い運動を考える Development パートナーとの関係を考える。
まとめ 10分	集合 (4) 3~4グループずつ見せ合う。 (5) 感想・まとめ	Evaluation 創作した動きを見せ合い, 討論する。

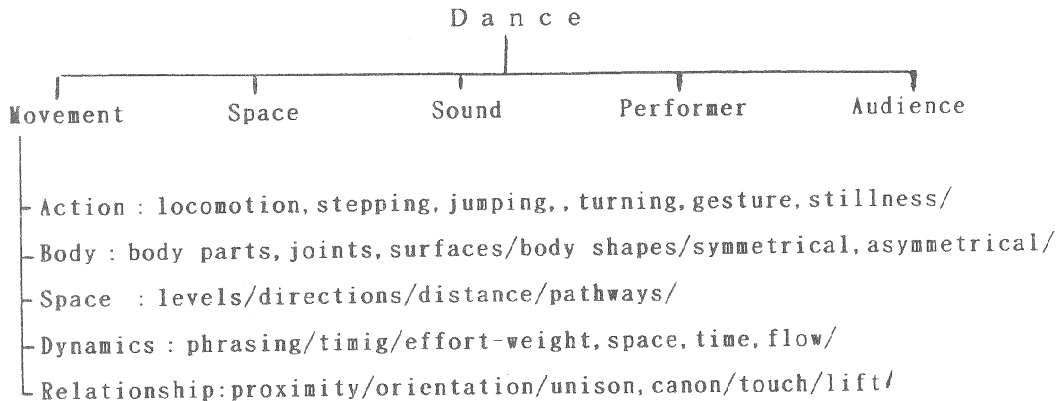
表10)

日本		英国
23)		
<p><課題>新聞紙（東京都高校一年） ねらい①新聞紙を手がかりにして楽しく心身をほぐす。 ②イメージを広げ、短いひとながれの動きを創る。 ③全身でなりきって踊る。 学習の進め方（実践例）</p>		<p>キーステージ4（14～16歳） 1) ビデオ① ほとんどが男子生徒の3グループの作品を鑑賞。 ウエイトやサスペンションを材料にした作品を展開。 リフトや体重支持等リスクの多い技術を用いていた。 （これは挑戦的課題を設け男子生徒にも取り組みやすいように配慮された結果であると考えられる。）</p>
導入	<p>所要時間（10分）</p> <p>内容とはこび</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集合、出欠確認 ・学習内容を知らせる。 ・W-up <ul style="list-style-type: none"> ①2人組で体を伸ばす。 ②パーティーケーキポルカでコミュニケーション。 	
	<p>集合－ねらい</p> <p>動きの手がかりをつくる。 ○大声で見出しを読む。</p> <p>○友達（2人）と動いてみる。</p> <p>○指導者のひとながれを動く。 －胸に当てて走る－ほおり投げる－下に滑り込む－</p> <p>新聞紙になって動く。 ①指導者の指示で</p> <p>②二人組の相手の指示で ジャンケンで勝った生徒から先生役、交代して動かし合う。</p> <p>新聞紙を見たててひとながれに ・4人グループでイメージを出し合い記録する。</p> <p>・掲示してみんなで見る。</p>	<p>2) ビデオ② 2人の生徒の作品が紹介されていた。有名作家の舞踊作品を覚え、各自の解釈で踊る。元は同一作品であるにも拘らず、全く異なる作品にみえた。かなり、高度のテクニックを持っていた。</p> <p>~~~~~</p> <p>参考：（16～18歳）</p> <p>3) GCSE, Aレベル試験の経験者 Aレベル試験を受けたい者は、週に6時間特別レッスンを受ける。</p> <p>現代舞踊テクニック／様々なダンススタイル／創作技術（ラバン分析を用いた）／即興／舞踊療法／舞踊史／舞踊記譜法等 彼らの多くは学外でのレッスンを受けている。</p>
課題	<p>（20分）</p>	
練習	<p>（10分）</p> <p>イメージを出しあってデッサン ・4つのイメージを動く。 ・ひとつを選び踊り込む。 グループ巡回、アドバイス</p>	
まとめ	<p>（10分）</p> <p>2グループずつイメージを言って見せ合い。 ・感想を言い合って。 もう一度全員で踊る。 集合－まとめ</p>	
<p>◇導入の課題としてどうだったか？ 新聞紙を持つことで、羞恥心を持たずに気楽に動きだせ、心身を解放してわっと踊るといふダンスの楽しさに瞬時に出会えること、そして、初心の生徒にも、発想し創り、踊り、観る、ダンスの学習に易しく進めることができるので、大変有効な課題である。</p>		

Body/Action, Space, Dynamics, Relationship

例) Movement aims-travel, turn, gesture (Action の下位項目)

注) ラバンの基礎理論では運動の構成要素を5領域とし, BodyとActionを分けて示す場合もある。(図2)



※各要素の下位項目は一部を列举してある。

図2 舞踊の媒体

注) Laban CentreではDanceの媒体を運動/空間/音/演技者/観客とし, 特にLabanの基礎理論である「運動分析」についての詳細な講義・創作実習が行なわれる。: Milca Leon a Choreological studies (Basic Laban Studies)の授業より。

2) Warm up

運動ができるように, 脈拍・体温・関節の可動性・筋温をあげ, 身体を強化する。また, 身体全体だけでなく身体部位を動かすことを注意し, 安全に身体を動かすことや正しい姿勢をとることが促される。指導者は積極的な雰囲気を作り出すように努力する。最後に, 次のセクションである「運動探求/発展」への関連を考え, 「ねらい」に関連する内容を折り込む。

3) Exploration and Development (+Dance)

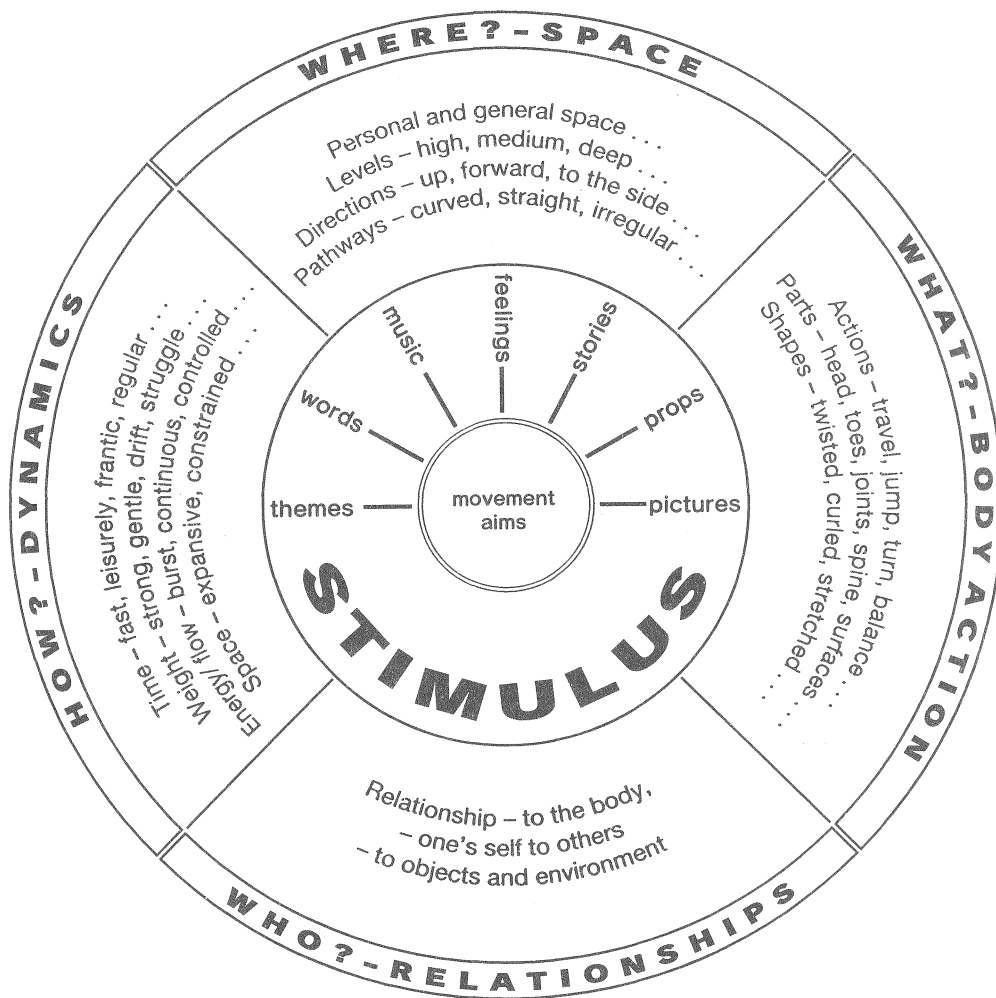
1) Exploration

模倣・変化(再構成, 拡大, 対比)・繰り返し(習得)という活動をしながら, 「ねらい」から生じる, 新しいアイデアを探求することや生徒の(運動的)語彙を拡大することに重点が置かれる。対比的課題は有効な手段であるとしている。

例) 急速に動くー静止する。全身ー部分。

2) Development

練習の必要な運動技術の発達に重点が置かれる。生徒自身の作業や他の人々との作業を選択し・繰り返し・明瞭化することを奨励される。そして, たとえどんなに短くてもシーケンス(単一の運動ではなく, それらが組み合わされ強弱をもつ, 一流れのまとまりを持たせる。日本では一般的にリズムパ



Movement Aims (図3)¹³⁾

Accompaniment also needs to be considered:
 voice, sounds, percussion, music, silence, text.

ターンやフレーズと呼ばれる。)を完成させるように促される。

4) Appreciation and Evaluation

授業で創作した、作品やシーケンスを見せ合う。観客として、集中力が要求される。また、観察や感想を述べることを奨励される。どのように観察すべきか、指導者によって導かれる。生徒たちが観察したことを描写(口頭で)させることは、観察眼を磨くことになるとしている。

例) travelling のシーケンスのなかで使用された方向は？ 経路は？ 高さは？

どの身体部分が、ジェスチャー（移動を含まない四肢の運動）をリードしましたか？

以上のように舞踊活動の基本である「創り・踊り・見る」から成り立ち、日本の授業構造と酷似しているが、ここで少々相違が見られるのは第一に、「ねらい」の立て方である。日本では指導要領の内容にも見られるように、具体的な題材を用い、それから導き出されるイメージを「表現」するイメージ課題が中心である。たとえ、それが運動課題（走る－止まるなど運動の組合せを課題とする）と呼ばれるものであっても、最終的には、どんなイメージが想起されたかという課題になる。大貫は、「特に、内面の表現を嫌がる中・高校期にそれを強要することになりはしないか？」と指摘し、前述したような提言をしている。

英国では、すでに述べたように Body/Action, Space, Dynamics, Relationship の4領域から選択された Movement aims 運動的「ねらい」が授業の中核をなし、刺激として使用した具体的題材や小道具などは、独創的な運動を「ねらい」に応じて導きだせればよく、そのものの形や様子に拘泥しなくても良い¹¹⁾。因みに筆者が、他の日本人学生と担当した7歳児に授業では、日本の「紙風船」を用い、「拡大－収縮」の運動探求を「ねらい」とした。その授業では、紙風船の形態・様子とはほど遠くはあったが、ユニークな運動が発表された。

また、表7～8に示すようにミス・ロビンスの授業 (Raventone Primary School) や在英中参観できた授業⁵⁾では、抽象的な運動創作が多く見られた。このことは、内面の表現よりも多様な運動体験を積ませること、知的に運動を操作することを意識させることを重視していると考えられる。ただし、この方法の問題点は、ともすると同じような運動になってしまう可能性もあり、日本の具体的題材から運動を導きだす、という方法をもう少し取り入れるべきではないかと考えられる。このことに関し、現場の指導者に質問したところ、「子供たちもアニメのヒーローの動きを模倣したがることもある。」との答えも返ってきている。日本の授業においては、逆に今少し抽象的に運動を探求する場面を取り入れることが必要に思われる。

第2点目は、「Warm up」の中味である。英国では、この時間に「Warm upで行った動きを Explorationで繋ぐ」などのように、本日の中心活動に使用する動きが、盛り込まれている。日本では、表6～10に示すように心身の運動に対する準備で終わる場合が多い。この点に関しては、日本においても Warm up の考え方の一つに「その日の課題の伏線となる」¹²⁾ ようにとの提案もされている。しかし、指導の模範例として毎年開催される研修会の指導例でも、そのことが余り強調されていない。マリオン・ゴフの提言にあるような、各セクションがロジカルに繋がるのがもう少し考えられる必要があると思われる。

第3点目は、「Development」の中に「+Dance」とあるように、その日の授業の終末では、自然にシーケンスができ、踊ることができるように配慮されている点である。すなわち授業の最初に移動・回転・跳躍など単一の運動を体験させ、運動的「ねらい」に応じてそれを繋ぎ、変化させ、抽象的な運動のシーケンスを創り、踊るという授業構造でもわかる。

また、マリオン・ゴフの模倣授業で取り上げられた珍しく具象的な題材「大掃除」では、各人に箒や

ブラシを持たせ、これらをどう動かすかを質問することで始まった。その後各自「歩くーブラシの動きージャンプー箒の動きーフォール（床へ転がる）」と繋げるように指示される。これらの運動をまた、「ねらい」に応じて方向を変化させたり、レベルを変化させたりした。ここで重要なことは、具象的な運動の間に「ジャンプ」や「フォール」など掃除に関係のない運動が挿入されていることである。これらの運動を具象的な運動の間に挿入することによって、自然に強弱ができ日本でいうところの「リズムパターン（強弱のある一流れの動き）」が出来上がっているのである。運動の「リズムパターン」をつくることは、簡単なようで困難である場合が多く、ともすると変身・模倣が単なるマイムで終わってしまうことも多い。前述の方法は単なる動きを容易に「踊り」にすることができる、日本にも適応可能な具体的方法と考えられる。

第4点目に、表9に示されるように Secondary School の生徒たちへの指導の一方法として示された例である。すなわち、最初から運動を創るのでなく、短い特徴のあるシーケンス（ここでは、1920年代のステップ/チャールストンから抽出された）を生徒に与え、これらの運動を「ねらい」に応じて変化させるのである。この年代は英国でもダンスすることへの抵抗があるようだが、この方法では与えられたシーケンスを分解したり、繋ぎ直したり、変化させることから「創る」楽しさへ導くことができる。この方法の日本においても初心者や中学校以上の内面の表現への抵抗を見せ始めた年代への指導に有効であると思われる。

おわりに

舞踊の効果的な指導法の資料を得るために、日英両国のナショナル・カリキュラムにおける学習内容、およびそれに基づく授業の実践例や代表例を比較してきた。これらの比較を通して以下のような示唆が得られた。

- 1) 具体的な題材の表現に偏らず、「運動」そのもののおもしろさを抽象的に追求する課題が取り入れられるべきである。
- 2) 「Warm up」には、運動に対する心身の準備だけでなく、「その日の課題の伏線となる」べき、内容も考慮されるべきである。
- 3) 授業の最後には、自然に「踊る」ことができるような、シーケンス創作への配慮がなされるべきである。
- 4) 初心者は内面の表現に抵抗のある年代への指導において、最初から「創る」ことを要求するのではなく、指導者が短いシーケンスを与え、それらを操作することから「創る」楽しさへ導くことも可能である。

今後は、ここで得られた示唆をもとに実証的に追求する必要があると思われる。

引用・参考文献

- 1) 安東伸介他編：イギリスの生活と文化事典。研究社出版。pp485-504 1982.
- 2) 舞踊教育研究会編：舞踊学講義。大修館書店。p126. 1991.

- 3) 前掲書 p200
- 4) 前掲書 p201
- 5) Eriko Komatsu: Report of Dance in Education. Laban Centre for Movement and Dance 「Dance in Education.」にて 1995
- 6) 阪田尚彦・高橋健夫・細江文利編著: 学校体育授業事典大修館書店 p110 1995
- 7) 前掲書 p485
- 8) Kate Harrison: Let's Dance. Hodder & Stoughton Ltd. 1993
- 9) 川口千代: 高学年の表現 - めあてを決めて, グループで工夫 -. 女子体育. 第37巻第7号 pp32-33 1995.
- 10) 栗原知子: ひとつの問い, いろいろな答え. 女子体育. 第37巻第7号 pp28-29 1995.
- 11) 小松恵理子: 英国ラバンセンターでの一年 - 効果的な指導法を模索して -. 体育の科学. 第46巻 第3号 pp253-256 1996.
- 12) 松本千代栄編: ダンスの教育学. 第3巻創作ダンスの基本的段階. 徳間書店 p19 1992.
- 13) Marion Gough: In Touch With Dance. Whitethorn Books. pp6-9 1993.
- 14) 前掲書 pp18-23
- 15) 前掲書 p101
- 16) 三浦弓杖編著: ダンスの学習指導. 光文書院 p17 1994.
- 17) 大貫秀明: 「表現」という呪縛 - ダンス教育を一考する -. 第46回日本体育学会抄録集 pp 1995
- 18) 大貫秀明: ラバンにとって「動き」とは, ラバンが考える「コレオロジー」. ドイツ・ダンスの百年 - 映像でみる身体のイメージと表現主義. pp50-57. 1996.
- 19) Patrisia Bowen-West: イギリスの舞踊教育制度 (1). 女子体育第32巻 第1号 pp4-11 1990
- 20) Patrisia Bowen-West: イギリスの舞踊教育制度 (2). 女子体育第32巻 第2号 pp 4-11 1990
- 21) Department of Education and Science and the Welsh Office.: PHYSICALEUCATION In the National Curriculum 1992.
- 22) 鈴木千鶴穂: 一緒に見つける仲間と工夫. 女子体育. 第37巻 第7号 pp30-31 1995.
- 23) 高野章子: 課題「新聞紙」実践研究 実践事例. 日本女子体育連盟紀要. '94-2 pp46-47 1995.
- 24) The Art Council of Great Britain: Arts Council Guidance on Dance Education Dance in School. 1993.
- 25) Valerie Preston-Dunlop: A Handbook for Dance in Education. Longman Group UK 1980
- 26) 宇土正彦・高島稔・永島惇正・高橋健夫編著: 体育教育法講義. 大修館書店. pp2-4 1992
- 27) 前掲書 pp34-35